

翻刻『梅屋敷の記——名このはな』
翻刻『松島紀行』

『このはな』（甲和二九八） 黒沢翁満書 弘化二年写 一冊（二五・五×一七・五。m）

表紙の書名『このはな』、内題『梅屋敷の記』、本文十丁、半丁に六行あて記載。表表紙の裏に、本文とは異なる字で「武蔵忍藩黒澤翁満先生書」と記された付箋、内題の下に「平迺家蔵書」の印があり、本文末に、「弘化二年二月十八日 翁満記」と記されている。

弘化二年二月、奇しくも大坂で会した四人の風流の士、小倉藩の大坂留守居役として赴任していた西田直養、武州忍藩大坂蔵屋敷勤仕の黒沢翁満（葎居）、因幡藩士として大坂在勤中の小林大茂、紀州藩士加納諸平（柿園）が、当時の梅の名所である梅屋敷へ船路で寒梅に出かけ共に過ごした一時を後の思い出にするべく、西田直養の発案で黒沢翁満がものした作品である。

舞台となった梅屋敷は、「摂津名所図会大成」、「浪華の賑ひ」等によれば、東都亀戸の梅屋敷を模して、文化年間に造ったもので、上之宮より乾の方、生玉馬場の東（現在の upper 町六・七丁目辺）にあり、園中に梅を植え、樹下に席を設け、如月の花の頃は清香四方に満ち、風流の好士が群れ集い遊観、また秋には菊観で賑わったとある。後年、平坦なつくりの同屋敷の北方に、地に高低をつけた新梅屋敷が出来たことから、旧梅屋敷と呼ばれた。明治三十六年頃は華城第一の梅の名所であったが、日露開戦の二三年後には、山口銀行主の山口吉郎右衛門氏本邸となり、大正期には忘れさられてしまった。



〔浪花百景一梅屋敷一〕（貞信画）



「浪花の賑ひ」より 梅屋敷（松川半山画）

〔松島紀行〕（甲和一二八五） 〔西山宗因〕著 寛文三年写 一冊（二五・五×十
八・五cm）

本書は、『松島紀行』と題したが、表紙・本文中には、書名・著者名共記載されていない。
表題紙（白紙）一丁、本文十四丁、半丁に八行あて記載、七丁と一行が松島への紀行文、
後に続く和歌百首の冒頭に宗因が名を記載、本文末に「干時寛文三年蠟月五日書也」とあ
る。

宗因の奥州紀行は、「奥州紀行」「奥州塩竈記」「陸奥塩竈一見記」「松島一見記」
「陸奥行脚記」等内容に異同を伴った作品となり、八木書店の『西山宗因全集4巻―奥
州紀行―/二巻―連歌篇二―』に翻刻して収載されている。本書は、その内の東京大学史
料編纂所「西山宗因筆歌書」（宮津三次郎氏旧蔵宗因自筆本影写）、学習院大学所蔵の宗
因自筆「西山宗因陸奥行脚記」と同系統の作品と思われるところから、同書に追加する意
味で翻刻を試みた。

参考文献

「撰津名所図会大成」 暁鐘成著 松川半山画 柳原書店 昭和五十一年刊 三七八/一
〇七

「浪華の賑ひ―梅屋敷― 暁鐘成編 松川半山画 河内屋喜兵衛 安政二年刊

「浪花百景」〔一名 浪花土産〕―梅屋敷― 長谷川貞信画 綿屋喜兵衛刊 三七八/五

三六

「浪花百景―梅やしき― 中井芳瀧画 立風書房 昭和五十一年刊 ぬ/一七八

「浪花百景 いまむかし」 大阪城天守閣編刊 二九一・六三/四八一N

「浪花自慢―別名風流画口合浪花名所道案内― 櫻亭似螻撰 松川半山画 三七八/一四二

「保古帖 十五巻・大坂嘉永二酉花鳥記」 〇四五/一六〇

「大坂繁昌詩」 田中金峰著 紀律堂蔵版 慶応三年刊 二三七・七/六八

「大阪と博覧会」 第五回内国勸業博覧会協賛会編纂 明治三十五年刊 八〇七/三三五

「上方」三十号―三十年前の大坂東郊（寺川信著）― 上方郷土研究蚊会編刊 雑四六八

「写真集 なにわ今昔」 毎日新聞社 昭和五八年刊 三七八/九二一

「西山宗因全集 二巻 四巻」 西山宗因著 八木書店 二〇〇六年刊 九一八・五

／一八N

凡例

本文は底本を忠実に翻刻することを原則としたが、通読の便を考慮して、句読点を施した。

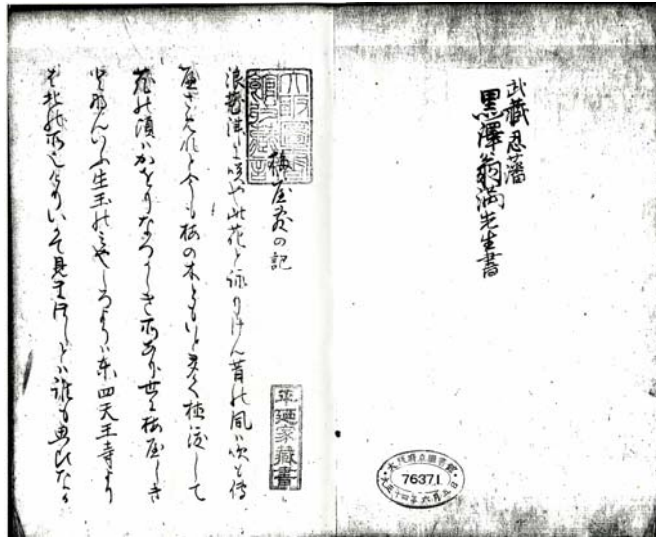
底本にある旧字体はそのままとしたが、一部活字のない物は通行の字体とした。

底本にある振り仮名はすべてそのままとした。

特殊な合字・異体字・連字体などは通行の字体に改めた。

底本が虫損により、判読困難な場合は「□」で、判読が可能な場合は「」で示した。

反復記号「ヽ」「ヾ」「ヿ」「ヾ」「ヿ」「ヾ」「ヿ」は底本のまま、漢字のくり返しは「々」で表示した。



「梅屋敷の記」



「松島紀行」

『梅屋敷の記——名このはな』

大阪府立中央図書館

安達 明子

宇円田 陽子

小笠原 弘之

北川 敬子

佐久間 素子

高崎 秀美

日置 将之

佐藤 敏江

八木 美恵

大阪府立中之島図書館

このはな

武蔵忍藩 黒澤翁満先生書

梅屋敷の記

平廼家藏書

浪花津に咲や此花と詠りけん昔の風は吹も傳へさめれと、今も梅の木ともいと多く植渡して、花の頃はかをりなつかしき所あり。世に梅屋しきとなんいふ。生玉のみやしるよりは東、四天王寺よりは北の所也けり。いかて見まほしとは誰も思ひなからに、猶打のとめられて遇しかちなるを、ことしくうけの三年というきさらきの十日八日、西田の直養かもとよりせうそこして、まのあたりかたらふへき事なんある。かならず今日をすくさてとやうになんいひおこせたるを、なその事そとてゆきて見たれば、あるしけふは加納の諸平と小林の大茂か爰にしもくなるを、おなしくはかいつらねて梅見に行んとなん思ふはいかにといふ。はやく思ひつる事をいと嬉しとなん聞みたるに、諸平きにけり。大茂はあしわけ小船にて、とみにはえなんとせうそこしたりければ、さらはあとよりおひしきぬへくちきりおきてゝ、いとあわたゝしうみたりたち出たるは、申の時にも猶おくれたるへし。すさともこれかれみたりよたりみて、その門の前より舟にのりてとさ堀をさかのほらす。舟人いへらく、時はいたうおくれたり。さす方は遠し。おん船はてなん程には、日も暮なんとすらんといひて、いとわひしと思ひたるを、すさともけしきとりていそかすもかし。直養はやう心しらひして、ひわりこ、つかさね、さゝえやうのものよういしたれば、船の内に取ちらして、酒のみものくひつゝ、何くれの物語りす。をりしも、今日はひなくもりとかや、古ことおほえて、いとゝ霞める空のけしきに、さゝ波よする川風の岸の柳をゆら／＼と吹なひけたるなど、いはん方なし。むつふるとちかかたみに酔ては、いとゝ心に残

す事なう、さえのかた歌の、かたわれたけく打かたらふ。いみしう面白し。船は西のよこ堀を南にをれて、道頓堀を東にやる。けに舟人かいへりけるやうにはてたれば、やかてくれにけり。そこより火ともして、ゆふやみは道たとくしなと打すしゆく。かやはかくるゝとおとろかし顔に、えならぬ風の吹すさふは、近つきやしたると嬉しきに、いと大なる門ありて、竹垣ひろらかにしめくらしたり。これなんさす所也ける。もろをり戸めきたるをおしひらいていれたり。くらければさたかならねと、たてもぬきも二まちにも猶あまりたらんと見ゆる庭に、梅ならぬ所もなく、近き梢はうす白みて、やみにも色の見えすしもあらず。香は空たきのやうになんみちくたりける。直養

さきつゝく梅のひかりにやみの夜もたそかれ時の心地こそすれ
なといふく猶奥深う下かけをあゆめは、やり水に棚はしわたして、石とも多たてたり。所々の小柴垣、とうろの姿さへいみしうえんにて、あくらたつものこゝかしこに並ひ、あつまやたつものなとも見えたり。もやにはひさしあり、はなちん傳あり。けうらをつくしたるまらうとゐ、ひとましめて人々のほる折にあひて、大茂もきつきぬ。めつらしうくはゝりたれば、物語ともく又改りてたのし。時に大茂

川風のはやきかをりのなかりせは水上遠き梅を見ましや

となんおくれたる心なるへし。いみしうそうそきたる女とも二人、へいし、かはらけもて出たり。つほけしり、さらやうの物までも、いとなん清かりける。われも人もひた物のみて、いたく酔たり。直養かいへらく、かうつとへりけるよたり、まると大茂は今は浪花人のやうなれと、おのかしゝの故郷をいへは、まろは豊国の道の口也。大茂はいなは也。諸平は紀、翁満はむさし、四方四国なるも、ちきりあやしからしやはとて、

ぬは玉の夜はあくとてもよもやまのものかたりをそなすへかりける

といふをうけて、諸平、其四方の国の四人か酒をのむ事も、おとらすまさらず、かたみに上にたゝん事かたく、下にたゝん事かたくなんあるへきといへは、人々とよみて、はとうちわらふ。女ともくいたうみたれて、昔梅の花のをとめになりて、夢にかたらひし古事も侍りとかや、かすならねとも、今やうひとかなてまひさふらはまし。きんたちうたひてたまはらしやなど、やうくにくつし出たるを、大茂手かきて、あなかまたまへ。おもとたちはしはし北おもてにゆきたれ。爰にはいとなんやくましきを。といへは、しゝまく口おほひたるもをかしと見るに、きんたちは世の人にも似すおはしますかな。ひるこそ千五百ともなくまうき侍れと、誰かはよるの梅見にき侍らましとわらふ。直養いなとよ、心もて見んに夜なれはとて、何かははた此物いふ梅の花は殊更にも夜こそはと打たはふるゝ

に、女どもは其心をえぬ成へし。諸平かたへより、くほの名をは何とかいふつらたり、けふくなど打すして、諸聲にわらへとも、猶其心をえしらねは、何事をいふらんなと思ふらん顔持してひきそはみをり。それをかしていとゝわらふ。大茂女の袖をひかへて月まちてゆかせと人のかこたてもやみに残さんそのゝ梅かは

いさとて東おもてのさうしおしあけたれは、いつの程にかみまの月たかうなりぬ。人々おとろきてはし近う立出て見るに、今唯今いこま山の峯をはなれて、霞める空よりほのゝしう梅の梢に影さしたるけしき、いはん方なう、花の色の見えそめては香さへそはれる心地して、いとゝ唯ならぬ夜のさま也。直養

香はかりと思ひの外にうれしきは梅のほつえの春の夜の月

大茂

くみかはす霞もしはし空にきえて梅かえわくる月をみるかな
おのれも

大かたはおほろにかすむ月かけのなと梅にのみさやけるらん
など詠ちらしてなほ見捨かたけれど、夜も更ぬ也。今はまかりなんとて人々おりたつ。あるし花の枝ともふさやかにたをりて、家つとにとて出したり。やかてすさにもたせたれは、道のおひ風猶えんなるもをかし。舟のとまにさしたるをみて大茂

ふきそへしを船のとまの梅かえにかけうかみてもおくる月かな
となんいへりけれど、誰も酔てよます成ぬ。さこそあれと、ひるの残りは猶忘かてにとうてしめたり。酒にしみなんといふもあれは、猿にかもなど爪はしきするもありて、いとゝ帰さはみたれにけり。酔のすさひにおもひよりて、浪花人ふたりかいふやう、今日の事のちの思ひ出くさにせはやとなんおもふをとて、諸平にはしかきせさせて、おのれに道の記せよといふ也。いたく酔たれはよろつ忘れたるをとわふれと、ゆるさねはいかゝはせん。さらはとてありつる、かくやよみしなど、したならず。はしに舟人の聲にて、おん船はてゝさふらふとなんいふ。

弘化三年二月十八日 翁満記

「松島紀行」

大阪府立中央図書館

小笠原 弘之

山田 瑞穂

大阪府立中之島図書館

佐藤 敏江

高萩 綾子

爰にひとりの翁あり。身はいやくて四の民にもましらす、形は釈義に似て精舎にも住せず。林下に心をおきなから、塵裏に恥るしれものなり。つくはの道を道として、其ともからを友とす。四方の国々に嘯き所々にあそふ。東の方に心さしける時はやよひの初になん。本より住所求るにしもあらず。身をうき草のさそはるゝ方もなくて、心の行所に任せて春過秋来り。すてに文月廿日余日には、陸奥なこそその関を越て何かしの城下にいたる。此地西北にめぐりて、みな山なり。山すくよかならずして茂林青々たり。南に川あり。日夜東流して葵海にのそめは、東吳万里の船を繋、ゆをひかなる壯観なり。なこそその関、さはこの御湯、野田の玉川、緒絶橋、小川の橋、岩城山、此城外一二里の間にあり。をのく興ある所なり。玉川の水上に山庄の地有。菊を東籬めく南山の柁時を多たり。茸かり、川逍遙のたよりよき所なり。海のつらには苦屋かたの休所あり。大河も垣根二なかれ、湖水門外にめくる。子陵かいとなみにことよせて日を暮し、夜を明す。さなから仙客にことならずして、斧柄も朽ぬへし。

世をつくす我所かせ下紅葉

やうく八月、いさよひの比、千賀のしほかまちかきにはあらねと、都よりたに思ひ立へきをとよほしおふせて、同行をさへたかひにければ、道すから口すさむ。つぶやきて相馬中村を過て名取川、仙臺河、宮城か原の萩の盛いとさらなり。

宮城野を都のさかは花もなし

けふ十六日にや。また朝霧のほとに彼浦につきぬ。聞ならく六十余國の中々「に」詞に絶たり。川原のおとゝの昔も思ひ出られて、彼朝臣のこゝによらなん。なかめし蜚の小舟に乗て霧の籬の嶋かくれなくさしめくる。

浦山はいつくはあれとあま小舟かゝる所のあきの夕きり

塩竈や色ある月のうす煙

嶋かくすそれも霧の籬哉

扱、松嶋のたゝすまひ、やうかはりて、いたりふかきくまく見所おゝし。其夜はあまの苦屋にやとりて、

松嶋の夕へを秋のゆふへかな

月にかせ雄嶋の蟹の袖枕

明れは廿二日、空よくはれたり。また一葉にさをさして、をしまか磯、何某の嶋、残る方なし。よのつねの松の枝さし、岩のかたち、すへて言つくすへうもあらず。天飛鷹の声友よふ衝、さなから画図にむかふかことく、又詩聲を聞に似たり。やうく遠寺の鐘夕照をとろかし、遠浦帰帆もよほしかほなり。興に乗して来り。今日のたのしみ何にたとへん。跡の白波帰さは信夫の郡、二本の松、三春など言渡をへて、又岩城に帰り入ぬ。爰に又日比有て、長月の末に、

千々の秋よしやわかれば命哉

有明のつれなやたつた独旅

笑草をさへとめ置て、此度ハ白川の関にかゝりて、

遠く聞秋風わくる関路哉

下野国あしのと言所に、西行法師のよめる清水なかるく柳あり。

時雨にも少時とてこそ柳陰

かせや時雨なすの笹原露もなし

神無月の初、武蔵国にいたりぬ。爰にも知人おほく、こなたかなた一日二日と過ゆくに、雪霰かちなる空には老の出たちもいかにそや。春待つてなど言に留られて、師走の空にもなりぬ。京の人来りあひて、物かたりつゐてに、やつかれかむすめ、文月の比うせにけるとふらひを言に、不計聞つけたる心地ともかくもおもひわかす。今迄つけさりし故郷人も覺束なく、夢にやあらん、偽にもやと萬におもひわくかたなし。いにし春、老の別をこそ心ほそう思ひしに、かくさかさま成愁にしつむハかへすくつれなき命にこそ。

かゝりける別れをしらて老か身の命はかりをおもひつるかな

からうして故郷のふみに、

あわれこのわかれを言もなくさめん人さへ旅におもふかなしさ

忍草の生ひたつを見ても、子はまさる覽とこそおもひやらるゝ。やみのうつゝは夢かとのみ、なみたに暮ゆく年の名残さへいとかなし。

打捨てこはなそ老の歳の暮

かくて年改り、明ゆく空、四方のけしきもいちしるし。天か下しろしめす御所なれば、御門くよりはしめ、民の家あまで松たてわたしたる。千年のかけにさし出へきならねと、世をいわひ、身をことたつ日なれば、

御代の春四方の本たつ東かな

むさし野や今朝は霞もなひく世の行末遠き春は来にけり

世間のとかに、花やかなる月日にそへても、心のやみはるゝかたなし。旅の空にしあれは、一僧を供養する事もなし。たゞ身つから念珠の序につゞり出たる句、百の数に及ぶ。ねかわくはあさかなる言種ながら唱る御名の力にひかれて、五障の罪をかるめ、九品の花ひらくるたよりともなれかしとなん、佛前にさゝけ奉るものならし。

宗因

春やあらぬさめぬや去年の秋の夢

露になれにし月かすむ袖

草枕旅に花咲花ちりて

跡ははるけき山路くらしつ

絶くの人けも里も見ゆる野に

舟わたすらし竹ふかきかけ

川口の涼しさそふる日は入て

雨落るかと水上のくも

一しきり風に木葉や乱るらん

遠きもちかくなれる鹿の音

かりねする麓の庵の月更て

鳴子引手の寒き小山田

露霜の行かふ空やはやからん

あはれいつくをかりの古郷

うきはたゞ春ともしらぬ左遷に

うらゝなるにもあらいその波

霞分いそく清見か関くれて

駒つからかし歩よりそする

袖をもる雪打はらふ度くゝに

庭につみ置かけの山柴

身をはかつ賤か住居にならして

なにかうき世に又はかへらん

ねかふこそ往生るへき御国なれ

あさはかならぬ契たかはし
見そめしはふりわけ髪の末かけて
床しや深き窓のよそをひ
ねぬる夜の夢にも梅やかほるらん
やゝ明かたの園のはつ蝶
小雨せし名残は露のあたゝかに
打出る野の春は珍らし
音たちて氷のひまのさゝれ水
里はなれなる沢田あらすな
呉竹のふしみの道は草ふかみ
山松の葉を落すしたかせ
月影や雪にまかへて鳴からず
枕わひしく明すふゆの夜
片敷もなこやかならぬ麻被
うつゝにつらきいにしへの夢
君かいにし朝の雲のなかめして
空も泪の雨やそふらし
限有時をかなしむ花さかり
したふ佛はけふの二月
墨染の夕の山やうす霞
繪によく似たる春を見る峰
かさなれる岩ほそひへし瀧落て
上つせ清き此よし野川
夏はたゝなかれていつら夕被
月にはれのく天の八重雲
七夕にかせる扇の風たちて
露更る夜のこすおろしてよ
来ぬ人にむしの音さへやよはるらし
しのひしものを恋草の色
落としても覚す袖の泪にて

つれくときく須磨の浦波
我ことや友まとはして鳴千鳥
分る芦原の夜道わひしき
あかつきの煙となして帰る野に
いくさの跡は民のやもなし
時しらぬ田は草村にうつもれて
またさし柳枝も茂らす
たゝへぬる水も少き池の面
霧の籬の見入寂しき
誰ふるす舎里に月の残る覽
千度礎の声そうらむる
秋更る風につけても物おもひ
もろき栴にまさる色人
一時雨そのま計のうき別
いつちゆきての道の山さと
石はしる清水をむすふ門前
夕日かくれにおそき蟬の音
苧しほにそよめく麦の秋見えて
かよふ野守か栖しるしも
跡はたゝ有と計の三の道
御法にしかしもろこしの文
同しくは世をいとふ身を苔衣
おもふ心の奥の山すみ
花まちて幾有明の寢覚せん
ゆふつけ鳥やさそふうくひす
いとはやも関の此方に年越て
都の人のけはひのとけし
道すから旅をなくさめよむ歌に
野山の夕浦のあけほの
秋にうつる心や春をわするらん

子あるちきりもよそけ身にしむ
しれものゝことかたらひて露泪
立らるゝ名を月も憐め

なかれ木と成し行衛をいかゝせん

谷川ひゝく五月雨のころ

雲ふかき山ほとゝきす跡絶て

あふちましりの林しけしも

里ひたる社を祝ふかたはらに

引をうしとや野飼捨けん

をのかとち童遊ぶに打みたれ

夜半にまろはす雪そえならぬ

朝速ひらく戸さしの寒き日に

おもむく道の末の根風

こくふねは比良の湊を目にかけて

波のうへもや暮残るらん

花の色を俤にして行水に

おしむ弥生の日数ほとなき

干時寛文三年臘月五日書也

おわりに

大阪府立中央・中之島両館では、近世から明治にかけての資料を所蔵しており、仕事の中でそうした資料を扱う必要がある事から、他機関からの出向職員を含む職員有志による勉強会を開催、テキストは中之島図書館所蔵の大阪に関する資料とし、近世の資料の解読と共に、大阪や古典籍に関する知識の獲得をめざしている。長年続けているが、その時々により構成メンバーが入れ替わっているため、今回は二段階に班分けし、大阪に関する資料二点をとりあげる事とした。